讀賣新聞

2007年(平成19年) 12月29日 土曜日

地震分布

「ひずみ集中帯」と一致せず

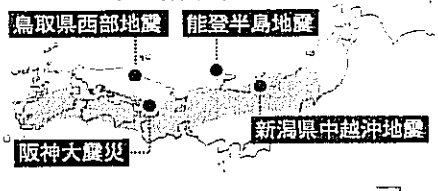
東大地震研が新説

新潟県中越沖地震や阪神大震災との関連が指摘されている「ひずみ集中帯」は、最近100年間の地震発生分布と比べるとあまり一致していないことが、東京大地震研究所の島崎邦彦教授（地震学）らの調査でわかった。集中帯は新潟―神戸と一般に考えられているが、研究チームは、全く別の分布を考えるべきだと指摘している。

研究チームは、古文書などのデータがある1596年以降に起きたマグニチュード6・8以上の内陸型地震52件の震央を、年代を五つに区切って分類。GPS（全地球測位システム）データから、ひずみ集中帯は新潟から神戸を通り、南九州まで続くとみて、その位置と重ね、どの程度一致するか統計的に計算した。

その結果、1896～2007年の20件の地震のうち、半数以上が能登半島地震のようにひずみ集中帯を外して発生。逆に1729～1914年に起きた20件の地震は、ほぼひずみ集中帯の中で起きていた。

研究チームは、現在内陸で大きな地震を起こす「見えない」ひずみは、プレート（板状の岩盤）の沈み込み運動でたまったもので、従来の集中帯とは違う分布をしていると結論。GPSで観測されている「見える」ひずみは、1729～1914年の地震で地下深部が動いて誕生したとしている。

名古屋大の鷺谷威准教授は「ひずみ変化は数百年で起きる。100年より長期間で評価するべきだ」としている。

島崎教授の調べた
ひずみ集中帯